

万葉集筑紫歌群

— 類歌性とその周辺 —

林 田 正 男

筑紫に関する万葉集の歌は、大伴旅人が大宰帥（神龜末年～天平初年）として筑紫の地にあった時期のものが大部分である。当時筑前国守であった、山上憶良と旅人との接触関係が相互に大きく影響していることはよく説かれるところである。この二人の歌を主とする巻五を始め巻三・四・六・八に筑紫に関する歌が載せられている。遣新羅使関係、筑前・豊前白水郎歌、防人歌関係、倭徒等の歌、及び長田王の歌のような年次未詳の歌を除けば次の如き作者である。

大伴旅人、山上憶良、藤原房前、吉田直、三島王、麻田陽春。

紀卿、小野老、粟田大夫、大伴大夫、葛井大成、笠沙弥、大伴百代、阿氏奥島、土師百村、史氏大原、山口若麿、丹（舟）氏麿、張氏福子、佐氏子首、板氏安麿、荒氏稻布、野氏宿奈麿、田氏肥人、高氏義通、磯氏法麿、志紀大道、榎氏鉢麿、田氏真上、村氏彼方、高氏老、高氏海人、土師水道、小野国堅、門部石足、小野淡理。

大伴坂上郎女、大伴四綱、石上堅魚、石川足人、宇努男人、余明軍、県犬養人上、丹生女王、賀茂女王、葛井広成、児島、三野石守。

そのほかに作者未詳歌が若干ある。左注に名が出る旅人の妻大伴郎女、大伴道足を加えれば、計五十名が大宰府関係の歌の形成者である。勿論これらの人々すべてが、筑紫の地にあったわけではない。旅人と都人の贈答、都から大宰府への公使、帰京後の献歌なども含むのであるが、一応の関係者いわば大宰圏の歌人群ということが出来る。

筑紫歌壇の特色として、まず第一に挙げられることは、都における赤人や金村の伝統的宮廷歌壇に対して旅人、憶良は当時の新知識である中国文学にも造詣が深く、それぞれ文学的志向は異なっているも知識人的な新傾向を示すことである。この傾向は他の大宰府の歌人たちにも多大の影響を与えたと思われる。これらの作者が自己の歌作に当り歌語の出典や手法を漢詩に求めたことは中西進博士の論に詳しい。^{注①)}

次に著名な梅花宴で代表される如く筑紫歌群においては「宴」に係わる歌が非常に多いことである。都から公使を迎えた宴、官人を送る餞宴、官人の交友の宴、又は宴席歌だろうと推定されるものも相当ある。^{注②)}

第三には古歌を襲用したり、その発想に用いたもの、いわゆる類歌、類句が多いことが挙げられる。本稿ではこの筑紫歌群と類歌性及びその周辺の問題について考えてみたい。

二

万葉集には多くの類歌が存することは周知の事実である。坂上郎女、大伴家持及び家持と同時代のいわゆる万葉末期の歌人たちにも類歌性は著しい。就中、家持は群を抜いて作歌数の多いことと相俟って類歌も多い。

高木市之助博士^{注③)}によれば、全歌数の四四%殆ど半数近くが類歌性又はそれらしい歌であると述べられる。そして博士は類歌性が万葉を支配していることについて、それは「短歌の古代性」であるとされる。これは万葉的性格の一面を的確に指摘された従うべき卓論である。

歌なるものが一種の共有財産であった上代において、古歌に依存する類歌が多産され、それが別種の歌と認識された。そして古歌を利用することは、かから上代人にとって教養の一つであった^{注④)}、と考えられる。であるからある作家に類歌が多いという一面だけで、その作家を模倣追従の歌人として一概に除けることは出来ない。

さて、大宰府圏の歌人達と類歌性はどうであるか。佐佐木信綱博士の『万葉集の研究三』などに教示を得て具体的に考察を試みる。まず最初に筑紫歌壇を代表する、巻五の梅花の宴の歌についてみる。

紀 脚5八1五——(琴歌譜所載の古歌謡)

小野 老5八1六——10一九七三(花詠)

栗田大夫 5 八一七 — 10 一八四六 (柳詠)

大伴百代 5 八二三 — 10 一八三二・一八三四 (雪詠)

阿氏奥島 5 八二四 — 10 一九四四・一九五七

史氏大原 5 八二六 — 10 二一七一 (露詠)

張氏福子 5 八二九 — 10 一九二二 (松寄)

小野国堅 5 八四四 — 8 一四二〇 (駿河采女)

小野淡理 5 八四六 — 12 三一五〇

後追和歌 5 八五〇 — 10 一八六六・一九四三 (花詠)

以上は、梅花の宴当時よりも古いと推定される類歌を挙げた。卷十は作者不明の巻であり作品の年代は明らかでないが、飛鳥藤原朝以降奈良朝初期の歌を集めた巻であろう、といわれているので、ここでは先蹤歌とみなしておく。留意すべきは卷十との類歌が目立つことである。それも人麻呂歌集や古歌集に出ずとあるものは一首もない。次に梅花宴以外の歌群についてみる。

大伴旅人 (異論ない作のみ) 3 三四三 — 11 二七四三・12 三〇八六。3 三三四 — 12 三〇六〇・三〇六二。4 五七四 — 3

二八七。4 五七五 — 11 二四九〇 (人麻呂歌集)。5 七九三 — 3 四四二。5 八〇七 — 11 二五四四・12 三二〇八。5

八一〇 — 12 二八九七。6 九六一 — 10 一八二三。6 九六八 — 11 二五八四。8 一四七三 — 10 一九七四。8 一五四三

— 10 一八六六・一九四三。

小野 老 3 三二八 — 15 三六〇二。6 九五二 — 2 二二一・7 一一五七。

大伴百代 4 五六〇 — 11 二五九二。4 五六一 — 12 三二〇〇。4 五六二 — 12 二九〇三。4 五六六 — 12 三二一六。

門部石足 4 五六八 — 10 二二九四・11 二四五三 (人麿歌集)・12 三〇八九。

吉田 宜 5 八六六 — 15 三五八八。5 八六七 — 2 八五・九〇。

葛井広成 6 九六二 — 7 一三三七。

土師水道 4 五五七 — 11 二五九〇。

石川足人贈歌（作未詳）4五四九―19四二四六。4五五〇―12三一八八。

三島 王5八八三―7一〇五。

賀茂女王4五六八―11二三五三（人麻呂歌集）

児 島6九六六―12二九一五。

瀟 誓4五七二―12三一八五。4五七三―4五六八。

余明軍4五七九―11二五八三。4五八〇―11二四七三、他に11に二例12に五例。3四五五―12二九六四。3四五

七―11二五二五・12三〇五五・三二七四。

以上が卷三・四・五・六・八に載せる筑紫関係歌群の類歌と思われるものである。

梅花の宴は、中国詩文に模した序文を有すること。大陸渡来の梅花を賦すことや中国風の人名表記など著しく中国的事であることは自明である。人々は「遠の朝廷」の官邸で梅花をめでつつ、中国の習俗である梅を「かざし」にしてその風流を楽しんだ。多くの人々が集まった雅筵が催され、その詠歌を残すことは文学史的にも大きな意義を有することは勿論である。

一方当時の都人が舶来の新趣味によって、梅花を大いに愛好したことも確かである。

もしもしきの大宮人は暇あれや梅をかざしてここに集へる（卷十、一八八三）

梅を「かざし」にすることは、当時の知識人たちの舶来趣味に負うものであるが、梅花の宴では、葛井大夫（八二〇）。笠沙弥（八二二）。丹氏麿呂（八二八）。荒氏稲布（八三二）。野氏宿奈麿（八三三）。磯氏法麿（八三六）。土師氏御通（八四三）。小野氏淡理（八四六）の八首を見る事が出来る。梅をかざす風流は梅花の宴において殊に著しいが、しかし前に挙げた如く中国の習俗をまねた当時の都人（貴族文人）の風流であったのである。

さてここで看過し得ないことは、前に挙げた類歌性を有する作者及び梅を「かざし」と詠み込んだ作者はいずれも大宰府の官人か国守クラスの作者に偏在し比較的下級の官人には類歌が少ないことである。特に、筑前介佐氏子首、壹岐守板氏安麻呂、大隅目榎氏鉢麻呂、筑前目田氏真人、壹岐目村氏彼方、対馬目高氏老、薩摩目高氏海人、など地方の官人に類歌や「かざし」などの歌がないことは注意される。

最後の土師氏御通、小野国堅、筑前掾門氏石足、小野淡理の四人については、この宴の人名表記には四種の区別があるが、四人は氏名を明記していること。石足は四等官である目よりも掾である石足が下位に列していることなどにより筑前国を代表する世話人で、他の三人は府を代表した世話人であろうことは旧稿で述べた。^{注同} 詳述はさけるが、いずれも文雅を解する人物として当日の世話人に選ばれたものであろう。類歌及び「かざし」のことは、これを裏付ける微証ともなる。

日本古典文学大系(万葉集三)の解説には、卷十について、「中国文化の影響などが相当量見出される点からして、当代知識階級の一級的水準の作が主となっている。…奈良びとが作歌の参考のために作った手控えを基礎として手を加えたものではなからうか。」と述べる。同じく卷十一、十二についても「作歌参考書として用いられた…両巻揃って存在するようになったのは恐らく養老、神亀の交で、そのあと家持の手が加わったとしても僅かであつたらう。」と説明している。大宰府時代以後の坂上郎女や家持にこの巻の類歌が多いことと併せて考えた場合、単にこれらの巻の歌が伝誦されたものでなく、郎女や家持はこの歌巻の影響を受けて作歌したとみるのが穏当である。同じことは筑紫歌群の類歌にもいえる。勿論これらの歌巻は伝誦性に富んだ歌、即ち民謡的な歌も充分に含んでいることは認められる。しかし、当面の筑紫歌群において、比較的下級官人に類歌が少なくその影響の少ないことは納得できない。やはり民謡的なものを含んでいても、天平初年頃には一応の纏りをなした歌稿が存して当時の貴族、官僚、文人などの作歌参考書として用いられていた、とみるべきであらう。

三

前に筑紫歌群の作者が卷十を始め作者未詳歌に類歌(卷七・十・十一・十二)があることはみた。そして彼等が先蹤歌である作者未詳歌に影響を受けて作歌していることは確かであった。

それならば、比較的下級官人の作者達は作者未詳歌に全然関知しなかったか。彼等の作にも作者未詳歌の語彙を模倣したかと思われる用例は見られる。たとえば、筑前介「年はきふ」。大隅目「春かたまけて」。壹岐目「春柳かづらに」。対島目「音きくなへ」などその他の用例が卷十・十一などにみえる。しかし一般的に語彙は不用意の蓄積であ

り一つの成句として慣用され歌語として用いられたと考えられる。やはり作者未詳歌の影響というより、これらの語彙は一般に浸透していたと考えるべきである。漢籍との影響については、今は触れない。

A 山上臣憶良の七夕歌十二首(中二首)

(八・一五一八)「右は、養老八年七月七日、令に応ふ」類歌10二〇一六・10二〇四八

(二五一九)「右は、神龜元年七月七日夜左大臣の宅にて作れり。」類歌10二〇七〇

B 大宰帥大伴脚、凶問に報ふる歌(五・七九三短歌) 神龜五年六月二十三日、類歌3四四二

大宰帥大伴脚の和ふる歌一首(八・一四七三) 神龜五年戊辰、類歌10一九七八

C 五年戊辰、大宰少貳石川足人朝臣の延遷さゆるに、筑前国蘆城の駅家に饒せる歌三首の中一首(四・五五〇)

作者未詳、類歌12三一八八

坂上郎女や大伴家持に天平初年以來にいたって、目立って作者未詳の巻との類歌が多いことは周知の通りである。

小野寺静子氏は「万葉集中、大伴集といわれる巻々における作者未詳歌との顕著な類似は、大伴坂上郎女注6)の存在によってもたらされたものであると考えられる。」と述べられる。氏の説の如く確かにその類歌性は顕著であり、坂上郎女の存在と類歌性は大伴集といわれる巻々の成立に関して有力なる立論となることは認める。しかし「大宰府において作者未詳歌があらわれるのは、実に郎女が下向してからのことである。」と述べられることには、いささか疑問がある。

大伴坂上郎女の太宰府下向の年月は不明である。坂上郎女の太宰府での歌作で確實と思われるものは巻四(五六三・五六四)の大伴百代の歌に対応する相聞歌二首のみである。これは後に載せる(五六七の左注)により、天平二年六月以前であることは確かである。小野寺氏も述べられる如く、坂上郎女の下向は、一般には天平初年のことではないかといわれる。だとすれば坂上郎女の下向以前に既に筑紫歌群には類歌を有する歌が歌作されているのである。

Aの憶良の歌は筑紫での作ではないが、既に養老の頃には作者未詳歌が作歌の参考に用いられていたのではあるまいか。特に普通の相聞歌ではなく、公式の「令に応ふ」ものや皇族の邸宅での雅宴での儀礼的な詠歌であることは一層その感を強くする。

Bの旅人の歌は共に左注に神龜五年と明記するものである。後の「和ふる歌」は勅使石上堅魚に和したもので、雑歌の部にあるが挽歌的発想にもとづくものと思われる。ともあれ旅人が大宰府に下向して歌作した最初と思われる歌に既に類歌が存する。

Cの歌は石川足人の遷任するに贈った歌である。作者は未詳であるが、おそらく府の官人などであろう。いずれにしろ大宰府の地で詠まれた神龜五年の作に類歌がある。

その他には、明確な年月は不明であるが、旅人の歌で都の某人との贈答（八〇七）「歌詞両首大宰帥大伴卿」。讃酒歌の中の一首（三・三四三）。帥大伴卿の歌五首、中の一首（三・三四四）。などにも類歌が存する。

坂上郎女の歌の天平初年以後の歌はしばらく措くとして、帰京途次の歌には類歌が認められる（詳しくは後述する）。又年代は明らかでないが、大宰府下向以前と推測される藤原大夫との贈答歌（4五二五—13三三一—3。4五二六—13三二—四四）にも類歌がある。しかし坂上郎女と筑紫歌群との類歌性については、特別な関わりを見出し得ない。坂上郎女の下向の意味と時期及び大宰府滞在時に寡黙であったことについては別に論じた。^{注(7)}前に述べた如く筑紫における坂上郎女の確実な歌作は帰京途次のものを除けば巻四に載せる次の二首である。

大宰大監大伴宿禰百代の恋の歌四首

事も無く生き来しものを老なみにかかる恋にもわれは会へるかも（五五九）

恋ひ死なむ時は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲りすれ（五六〇）

思はぬを思ふといはば大野なる三笠の社の神し知らさむ（五六一）

暇無く人の眉根をいたづらにかかしめつつも逢はぬ妹かも（五六二）

大伴坂上郎女の歌二首

黒髪に白髪交り老ゆるまでかかる恋にはいまだ会はなかに（五六三）

山菅の実成らぬことをわれに依せ言はれし君は誰とか宿らむ（五六四）

この一連の歌は、大伴百代の四首に坂上郎女が答えた歌と思われる。相聞の部に載せるので、両歌群が対応する歌であることは確かであろうが、解しかたによっては色々と取れる。歌の内容からは百代の申し出を郎女は巧妙に拒絶

していることになる。しかし「宴席などで恋を題にした戯れ的な歌」^{注⑧}とみるのが穏当であろう。

百代の歌に卷十一・十二に類歌が存することは前掲の如くであるが、この百代の歌（四首中三首）に類歌があることなどから、土居光知博士^{注⑨}は「大伴百代のような大伴家の人を中心にして歌学びをする九州の人たちが『古今相聞往来歌類』と称せられる歌集を編集しつゝあった」と推定されている。この推定は俄かには決定しがたいが、筑紫歌群の類歌に人麻呂歌集や古歌集に出ずる、とある歌との類歌が旅人の（四・五七五）と賀茂女王（四・五六八）以外にはみあたらないことから蓋然性の高い推定である。又博士は前掲の百代の歌に郎女の歌が照応しないことから「坂上郎女は奈良から来たばかりで、いまだこの歌集を見ておらず、歌集中の歌を利用することができなかった。」とも述べられる。一方小野寺氏（前掲）は「百代が郎女の好みに合せ、卷十一、十二との類歌を作した。」と述べられている。であれば類歌の面からいって百代の歌に照応出来なかつたことは反面からいえば、土居博士の説の如く卷十一・十二の歌を知らなかつたことの証ともなる。現に卷四の藤原大夫と坂上郎女との贈答歌は、藤原大夫の（五二三）の歌が卷十三（三二六四）に類歌が存することを充分に承知の上で、郎女も（五二五）の歌で同じ卷十三（三二二三）の類歌で和しているではないか。

郎女の天平五年かと思われる作に

月立ちてただ三日月の眉根かきけ長く恋ひし君に相へるかも（六・九九三）

がある。これは百代の作（前掲五六二）に学んだことは明らかである。

以後の坂上郎女の歌に卷十一・十二の類歌が顯著であっても、それを大宰府時代にまで溯ってそのまま用いるのは適当でない。むしろ大宰府時代に卷十・十一・十二などの歌を知り、それを以後の作歌活動に参考にしたと見る方が穏当である。

以上見てきた如く坂上郎女と筑紫歌群の類歌性の問題とは特別な関わりを見出し得ない。否坂上郎女は筑紫歌壇においてはむしろ第三者的立場にいたといえる。それは大宰府下向時に積極的な作歌活動のないことからいえる。

冬十一月、大伴坂上郎女の帥の家を發し上道して、筑前国宗形郡名児山を越ゆる時に、作る歌一首（卷六・九六三）類歌7 一一一三。

同じ坂上郎女の京に向ふ海路に浜の貝を見て作る歌一首（九六四）類歌7 一一四七。

この歌は題詞に示す如く、天平二年十二月の旅人の帰京に先だつて、一カ月早く坂上郎女が帰京の途に就きその途次宗形郡で詠んだ歌である。これには二首とも巻七に類歌がある。その他には藤原大夫との贈答の次に載せる「また、大伴坂上郎女の歌一首」4 五二九—7 一二九—（人麿集）などがある。

筑紫歌群で巻七に類歌の存する作者は、坂上郎女以外では、前に挙げた如く三島王、葛井広成、と小野老だけである。

まず便宜上小野老の歌よりみる。

夕さらば潮満ち来なむ住吉の浅香の浦に玉藻刈りてな（二・一二二）弓削皇子

時つ風吹くべくなりぬ香椎瀉潮干の浦に玉藻刈りてな（六・九五八）老

時つ風吹かまく知らず阿胡の海の朝明の潮に玉藻刈りてな（七・一一一五七）未詳

吉野川ゆく瀬の早みしましくも淀むことなくありこせぬかも（二・一二九）弓削皇子

梅の花今咲けると散り過ぎずわが家の園にありこせぬかも（五・八二六）老

小野老は集中に短歌三首しか歌を残していない。その老の二首中に弓削皇子の歌（集中短歌八首）と二箇処の類同がある。これは偶然的の暗合として片づける事は出来ない。巻七との類同も明らかであるが「時つ風」などは卷二（二二〇）の人麻呂の歌などにもみられる語句であるので必ずしも巻七との類歌と断じることが出来ない。歌語の多くが、その先蹤を万葉集の前の時代に採るのは一般的に多いのであるが、しかし又一方においては万葉初期の作者の歌が人々に伝承されるにつけて、その一部が改変されて作者未詳の歌巻に収められた歌も多かつたと推定される。

たとえば、磐姫皇后（二・八六）や弓削皇子（二・一二〇）などの歌が、金村（四・五四四）、家持（四・七三二）、坂上

郎女（四・七二〇）などの歌作に襲用されると共に一方においては卷十一（二六九三）や卷十二（二九二三）などに作者未詳歌として類歌が存する如くである。老の場合もむしろ弓削皇子の歌を念頭に置いて歌作した可能性が強いと思われるので卷七に学んだ類歌ではないとみたい。

次に三島王の歌であるが、

三島王の、後に追ひて松浦佐用比売の歌に和ふる一首

音に聞き目にはいまだ見ず佐用比売が領巾振りきとふ君松浦山（五・八八三）

これは卷五の松浦佐用比売の一連の歌に和えた歌であるが、三島王が筑紫に下られた形跡はない。歌の内容（君まつ―君待）からも都での歌作であることは確かである。三島王は卷五における唯一の皇室関係の作者であるが、その和え歌が卷七に類歌が存することは注意される。

天平二年庚午、勅して權駿馬使大伴道足宿禰を遣す時の歌一首

奥山の磐にこけむし恐くも問ひたまふかも思ひ堪へなくに（六・九六二）

右は、勅使大伴道足宿禰を、帥の家に饗す。此の日会集の衆諸、使使葛井連広成を相誘ひて曰はく、歌詞を作るべしと言ふ。登時広成声に応へて、此の歌を吟ふ。

とある。「登時」は即座に、すぐにの意であり、「思ひ堪へなくに」は十分考えることもできませんのに、であるから即座に誦詠したものである。広成は「恐らく当時教養人として知られていたもので、この場合も詠歌を求められたのであろう」（日本古典文学大系万葉集二頭注）と考えられる。留意すべきは教養人であると考えられる広成が、卷七の歌を原歌として即興的に類歌を詠じていることである。広成は使使として都より大宰府に来たのであるから、当時の都の文芸的風潮を代弁するものと見ることが出来る。

それは当時の中央の歌人達と卷七の関係からいえることである。まず、当時の宮廷歌人的存在にあってといわれる笠金村についてみる。

養老七年、芳野離宮に幸しし時笠金村の作る歌 6 九〇九―7 一一〇七。

神龜五年、難波宮に幸しし時作れる歌、笠朝金村之歌中出 6 九五―7 一二七・一三一七。

天平初年か、笠朝臣金村、塩津山にて作れる歌 3 三六四—7 一〇七〇。3 三六五—7 一一九一・一一九二。

などがある。金村は人麻呂の作品の模倣追従が多い作者だと一般的に評されているが、巻七の未詳歌の襲用も多い。

この金村の塩津山の歌と同時の作に、石上乙麻呂にも 3 三六八—7 一三八六がある。乙麻呂は集中七首の歌（疑問ある歌を含む）を残し、又懐風藻にも詩四首を残している。いわば当時の文化的貴族であるということが出来る。

次に年月未詳ではあるが同じ天平初年頃のものと思われるものに、若湯座王の 3 三五二—7 一一六二・一一九八などにも類歌がある。その他管見に入ったものは、神亀六年、膳部王を悲傷める歌（作未詳） 3 四四二—7 一二七〇（古歌集）。天平五年、湯原王の月の歌 6 九八五—7 一〇七二。湯原王は志貴皇子の第二子で集中歌数十九首。王の歌は、万葉集第三期から第四期へかけての歌風の交遷を代表する作風であるといわれるが、その王の歌に巻七との類歌が存するのは興味が深い。

更には天平八年、忌部首黒麻呂、「友のおそく来るを恨むる歌」 6 一〇〇八—7 一〇七一・一〇八四などがある。以上の如く都に關係する中央の歌人達それも、皇族や貴族、文人などの歌作に巻七との類歌が顕著である。これらの歌の良否は別として、当時中央においては、巻七の歌を利用して場に應ずることが流行的な風潮であったと思われる。

さて前にみた、坂上郎女は類歌の面からいえば、大宰府時代までは巻十三と巻七にしか類歌を有しない。この点からいえば都の歌人に近い存在であったといえる。

大伴家持の作品には人麻呂、憶良を始め赤人や父旅人など個々の有名歌人に直接学んだ作も多い。また一方においては作者未詳の古歌からも多く学んでいる。この両者を併せれば極めて広い範囲に亘っていることになる。換言すればそれは家持以前の万葉集の殆ど全巻に亘っているといえる。しかし筑紫歌群と類歌性という面からいえば、直接この歌群より学んだもの以外に、一つの経路として次のようなコースを取ったものもある。簡単な事実であるが、まず指摘しておく。

A 未詳歌——筑紫歌——家持及びその他

B 未詳歌——筑紫歌——坂上郎女——家持

C 筑紫歌——坂上郎女——家持

Aのコースを取った歌も多い。たとえば梅花宴の歌の作者で前掲の未詳歌に類歌を持つ人のうち、紀卿の歌と(八・四〇七二)。粟田大夫と(八・四〇七二)。大伴百代と(八・一四四一、一八・四〇七九)。阿氏奥島と(一九・四二八六)などを挙げることが出来る。家持は天平勝宝二年に「筑紫の大宰の時の春の苑の梅の歌に追ひて和ふる一首」(一九・四一七四)を詠じているので、当時を回顧し特に興を感じたのであろう。その他の作者については、これも同じ梅花宴の歌作に追和した大伴書持の「追ひて大宰の時の梅花に和ふる新しき歌六首」(一七・三九〇一—三九〇六)がある。紀卿の歌と(三九〇二)。小野大夫と(三九〇二)。粟田大夫と(三九〇三)。大伴百代と(三九〇六)などである。これは必ずしも類歌ではないが、原歌の順序に従ってその句を受けて六首が詠まれている。したがってその目標の歌をもって追和されたものであるからAのコースの関係にあるものとみなし得る。

Bのコースとしては、未詳歌(十一・二五八三)、余明軍(四・五七九)、坂上郎女(四・六六六)、家持(四・七五二)。未詳歌(十一・二六一四)、大伴百代(四・五六二)、坂上郎女(六・九九三)、家持(六・九九四)などがみえる。

Cとしては、旅人、房前(五・八二一、一八二)、坂上郎女(六・九九五)、家持(四・七七三、一九・四一六二)。満誓、旅人(五・八二二、八三二)、坂上郎女(八・一六五六)、書持(一七・三九〇五)などを挙げることが出来る。

類歌の問題は解しかたによっては若干異なる場合があると思われる。上に述べたものの一部は類句も含めた場合があるが一応このような経路が考えられる。上の場合必ずしも坂上郎女でなくともそれに変わる某人を経たものであっても差し支えない。

因みに類歌性の面だけではなく漢籍の影響などにも同じことがいえる。たとえば、遊仙窟の影響もそうである。巻十一・十二を経て、大伴百代—坂上郎女—家持などの経路が考えられる。この場合も憶良や旅人などからの直接の影響を受けた場合も勿論あったであろう。

さて結論としては、神龜末年から天平初年にかけて大宰府を中心とした、いわゆる筑紫歌壇の文学を類歌性の問題より考えてみた。これによれば作者未詳歌を載せる巻十・十一・十二などの歌巻に負うところが顕著であった。就中、梅花の宴の作者は巻十に負う歌が多く、そして地方の下級官吏などにはその影響が看取出来ない。これによれば

次のような推定が可能となる。作者未詳の歌巻は民謡的なものを含んでいても、それは人口に膾炙されるというほどのものではなく、(ある種の人々はそうであっても)特に地方の下級官人などには知られていなかった。そして当時の大宰府には歌作の参考のためこれらの歌の手控なり歌メモが存したと思われる。おそらくそれは旅人か大伴百代あたりの手元に有り歌まなびをする府の官人や国守などの作歌の参考となったのではなかるうか。特に巻十については、梅花の宴にその類歌が偏在することからも確かな推定と思われる。一方当時の中央歌壇においては、作者未詳の歌巻の中でも巻七との類歌が目立っており、都人によく利用された。

大久保正^{注10}氏は巻十について「巻七よりやや新しい歌が多いと思われ、繊維優美な感じの歌が多くなっている。」と解説されている。であれば、歌巻の利用の状況からいえば筑紫歌群の方が末期万葉の文芸思潮に近いことになる。

特に梅花宴の歌どもは既に末期万葉へと流れていく文芸的萌芽が看取される。坂上郎女については、郎女が筑紫に下向してから作者未詳歌との類歌があらわれる、と見るむきもあるが、これには従いがたい。むしろ坂上郎女は筑紫に下向することによって、これらの歌巻に親しむようになったと解するのが穏当^{注11}である。因みに坂上郎女を筑紫歌群の原資料の収集者に擬すべきでないことは、日野みつ子氏に論があり、私も前稿で論じた^{注12}。本稿で論じた類歌性の問題は旧稿で論じたこの問題を補強する一証ともなるが、いずれにしろ坂上郎女と筑紫歌群の類歌性の面からは特別な係わりは認めがたい。しかし、未詳歌——筑紫歌群——坂上郎女——家持というようにして末期万葉の世界へと流れていく経路において坂上郎女の存在が大きな役割を成したことは充分に認められる。

以上筑紫歌群と類歌性ということを中心に二三の問題を考えた。筑紫歌群については論ずべきことも多いがすべて後稿にゆだね擲筆する。

注(1) 『万葉集の比較文学的研究』第九章第十章、中西進博士

(2) 国語と国文学、昭和四十五年十一月「小野老小考——咲く花の歌をめぐる——」拙稿

(3) 『古文芸の論』二二六頁、高木市之助博士

(4) 万葉五五号、昭和四十一年四月「同形歌少異歌放」伊藤博氏

- (5) 『万葉集講座』五、有精堂「大宰府の歌人たち」拙稿
- (6) 万葉七十九号、昭和四十七年五月「怨恨の歌——大伴坂上郎女の志同する世界——」小野寺静子氏
- (7) 文学・語学六六号、昭和四十八年三月「筑紫歌群素描——巻三・四・六・八と大伴百代——」拙稿
- (8) 日本歌人講座Ⅰ「上古の歌人」所収「大伴坂上郎女」青木生子博士
- (9) 『古代伝説と文学』一一七頁、土居光知博士
- (10) 『上代日本文学概説』一七一頁、大久保正氏
- (11) 国語と国文学、昭和四十四年十月「大伴坂上郎女に関する考察」日野みつ子氏
- (12) 注(7)に同じ。

水辺の遊び

——万葉集における三月上旬巳の頃——

林 田 洋 子

万葉集は春の若菜、摘みの少女達に呼びかけた雄略天皇の御製を巻頭に置く。若菜を摘む歌は

春山の咲きのををりに春菜つむ妹が白紐見らくしよしも

(8・春雑・一四二一・尾張連)

明日よりは春菜採まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ

(8・春雑・一四二七・山部赤人)

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはぎ採みて煮らしも

(10・春雑・一八七九)

などにみられ、また巻十六には、三月の丘に若菜の羹を煮る九人の娘子と、そこに出会った竹取の翁との楽しい歌のやりとりを載せている。春に萌え出る若菜は若返りの妙薬とされたが、これを採むのは一定期間山野に籠って神聖な生活を送る少女達の仕事であつたらしい。こういう少女達の歌を大伴家持(17・三九六九)と池主(17・三九七三)が